



改訂版

『THE HAPPY  
PRINCE』  
をハートで読む

田村 和子・編著

Kazuko Tamura

文芸社

# 電子書籍の操作について

- ・ 目次をクリックすると、該当ページまで移動します。  
また、移動先ページの見出しをクリックすると、目次に戻ります。
- ・ 「十字キー」やマウスのホイールを使用して読み進めます。
- ・ 「フルスクリーンモード」に設定すると、読みやすくなります。

「フルスクリーンモード」設定方法

メニューバー「表示」→「フルスクリーンモード」

Escキーで元の表示に戻ります。

※パソコン環境により、「フルスクリーンモード」が使用できない場合があります。



改訂版  
『THE HAPPY  
PRINCE』  
をハートで読む

田村 和子・編著

Kazuko Tamura



## はしがき

初めに私の高校時代の英語の勉強について書きますと、「ただ語句を規則に従って並べているだけのような気がして実感がなく、このように勉強して本当に英語が身につくのだろうか？」という漠然とした疑問を持ったりして、あまり力が入りませんでした。二十歳のころ断片的ですが、英語の科学論文を読んでいて科学用語ばかりの文の中で動詞の辺りに触れますと、背景に人の気配を感じてうれしくなりました。それは動詞の辺りにある書いた方の心の態度に触れたからなのだと思います。このことが本書を執筆する発端となりました。

なお「心の態度」という言葉は「心的態度」ともいわれ、第1章に出てきますが、文法用語です。この「心の態度」は英語ではmoodですが、moodは心の中のことなので、本書の表題に「ハート」を加えました。

第1章では私が高校時代に学習して印象に残っているOscar Wilde (1854～1900) の『THE HAPPY PRINCE』の中から簡単な文を引用し、文法上の主語、補語、目的語、直説法、過去時制などの文法用語を用いて文の構成を考えながら動詞を探究し、それらの動詞が定形動詞であることを説明しようとしています。そこで、「文法上の主語と人称・数の呼応があったり消失したりして、法・時制などを示している動詞は定形動詞である」と述べています。そして文法上の主

語と定形動詞との関係、次いで書き手が書いているときを現在とする書き手の立場での文法上の主語と定形動詞との関係、さらに、この童話に登場する ‘I’ の観点で文法上の主語について説明しています。この章は少々理論的ですが、短くてやさしいので簡単に読めます。

ちなみに Oscar Wilde は1854年にアイルランドのダブリンで生まれました。父は耳および眼科の名医で飲酒癖があり、アイルランドの文学と考古学に造詣が深かったようです。母は古典語に通じ、詩を書いたそうです。彼は1871年ダブリンのトリニティ・カレッジに入学し、1874年オックスフォードのマグダレン・カレッジに進み、後に唯美運動の中心人物となりました。1884年結婚し、『THE HAPPY PRINCE』は『The Happy Prince and Other Tales』と題して1888年に出版されました（注）。彼は二人の息子に自作を読んで聞かせ、子供のような心を持った若い人や大人のために書いたと話したそうです。

第2章では『THE HAPPY PRINCE』全文を形式段落ごとに区切り、定形動詞の下に「番号」を付け、単語の下に発音の一例を記しました。そこでは少し範囲を広げて、書き手が書いているとき、あるいは話し手が話しているときを現在とする書き手あるいは話し手の立場で定形動詞とその関連語句について重点を置いて説明しました。多くは定形動詞とその関連語句について、文法上の主語との関係を説明しています。そのように説明することで、英文の根底にあるものを理解し、『THE HAPPY PRINCE』の英語の世界に入っていける

ように試みました。

ところで言語は流動的ですので、定形動詞とその関連語句の中に省略、代用、慣用などもありました。また定形動詞とその関連語句について、節の中で、節と節の中で、あるいは文脈の中で考えなくてはならない場合などもありました。それから定形動詞を含んだ文が転じたり、もともと定形動詞のない文もありました。また主語が省略されている文もありました。この書き手あるいは話し手の立場での定形動詞とその関連語句についての説明には、『新英語学辞典』（監修＝大塚高信・中島文雄、研究社）などの文法書を参考にさせていただきました。

また、この章は前から訳していますので、順次解説文を読んでいきますと、英文が組み立てられ、意味が取れるようになっています。部分訳では解説文の和訳をまとめ、自然な日本語を目指しました。

私はこのように読むことによって簡単な英語を話したり書いたりすることに確信が持てるようになり、英語の世界に入っていくやすくなりました。本書は高校ぐらいの英語レベルで基本的なことは一通り勉強したが、英語が自分のものになっていないという方にもお勧めしたいです。

第3章では、この童話を原文だけで黙読したり音読したりしていただき、意味が取れないところはその部分の解説をお読みいただきたいです。また以前にお読みになられた方も、もう一度、名作に触れてはいかがでしょうか。私には像になった「幸福な王子」や「燕」のようにはとうてい生きられ

ませんが、時折引き出しから取り出して読みたい一冊です。筆者としては、読者の皆様が英語の世界に一步踏み込んで名作を味わってくだされば、という思いです。

なお私はこの原稿を仕上げるに際して何回も書き直し、そのたびにコピーをしました。夫にはよくこれに付き合ってもらい、本当にありがたかったです。出版は生前に間に合いませんでしたが、深く感謝しています。そして亡き祖母、亡き両親に感謝します。

2011年 3月

田村 和子

(注) 英語の原文は『The Happy Prince AND OTHER TALES』(Oscar Wilde著、Everyman's Library/Children's Classics、1995年)から採用しています。また英文の形式に関しては『研究社新訳注双書THE HAPPY PRINCE & OTHER STORIES (幸福な王子 他4編)』(海老池俊治訳注、研究社、1951年)他を参照しました。

## 目 次

はしがき .....	3
第1章 定形動詞について .....	9
第2章 『THE HAPPY PRINCE』を 動詞に着目して読む .....	17
第3章 『THE HAPPY PRINCE』を 原文だけで読む .....	181



# 第1章

---

## 定形動詞について





の句を大きくしています。

This was his courtship , and

句

it lasted all through the summer .

句

副詞 *all* は句 *through the summer* を修飾しますので、*all through the summer* となって、さらに大きな句になります。

This was his courtship , and

句

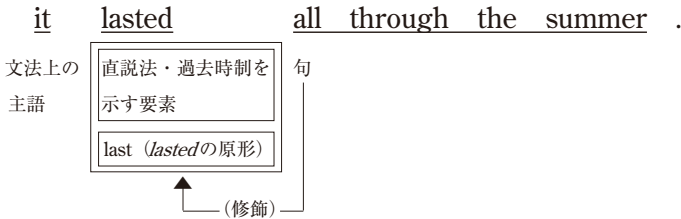
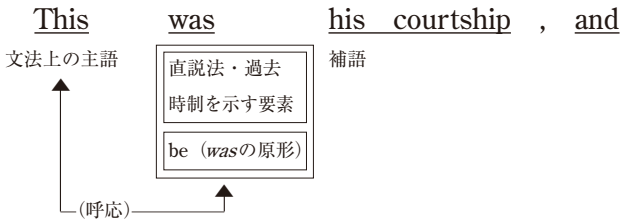
it lasted all through the summer .

句

続いて、*This* と *was* と *his courtship* の構成と、*it* と *lasted* と *all through the summer* の構成を考えます。

前者において、*This* は *was* と三人称・単数で呼応して文法上の主語となっています。*was* は直説法（法とは物事の述べ方を決定する心の態度、ないしはこれを示す語形変化）・過去時制（時制とは動詞の時を表す形態）を示す要素と、*be* (*was* の原形) の二つの観点から分析できます。*his courtship* は *was* の叙述を完全なものにする補語です。

後者においては、*it* は *lasted* と人称・数の呼応は消失していますが、文法上の主語です。*lasted* は直説法・過去時制を示す要素と *last* (*lasted* の原形) の二つの観点から分析できます。*all through the summer* は「すっかり夏じゅう (夏じゅうずっと)」という意味で、*lasted* の目的語でもなく補語でもありませんが、これを修飾する句です。



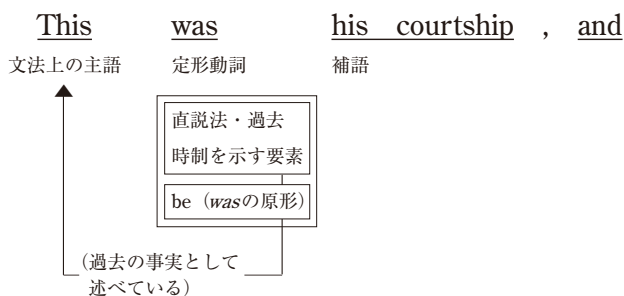
したがって、*was* や *lasted* はそれぞれの文法上の主語と人称・数の呼応があったり消失したりして、法・時制などを示しているのが定形動詞です。

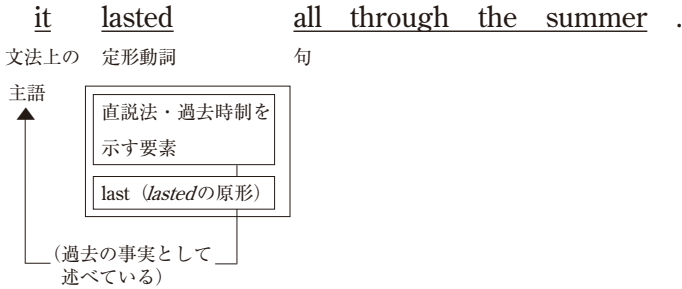
定形動詞とは文法上の主語によって限定されて、数・人称・時制・法などを示す動詞の形であり、動詞の種類ではなく、動詞の形態についての名称です。am、is、are、was、

were / have、has、had / do、does、did / shall、should / will、would / can、could / may、might / must / ought / used など定形動詞です。また isn't、couldn't のような縮約形（短縮形）も定形動詞に含みます。

なお、これらの定形動詞とそれぞれの文法上の主語についていえば、これらの定形動詞の直説法・過去時制を示す要素が、それぞれの文法上の主語について過去の事実としての要素を表している、ということです。このことは書き手が書いているときを現在とする書き手の立場から見ると、「それぞれの文法上の主語について過去の事実として述べている」ことです。

つまり、Oscar Wildeはこの童話に登場する 'I' の観点で、それぞれの文法上の主語について過去の事実として書いているのです。この文は「これが彼の求愛であった、そして、それは夏じゅうずっと続いた」という意味になります。





この章では定形動詞について説明しようとしてきました。そして文法上の主語と定形動詞との関係、次いで書き手の立場での文法上の主語と定形動詞との関係、さらに、この童話に登場する ‘I’ の観点で文法上の主語について説明しました。

次章では『THE HAPPY PRINCE』全文を形式段落ごとに区切り、定形動詞の下に「番号」を付け、単語の下に発音の一例を記しました。そこでは少し範囲を広げて、書き手が書いているとき、あるいは話し手が話しているときを現在とする書き手あるいは話し手の立場で、定形動詞とその関連語句について重点を置いて説明し、多くは定形動詞とその関連語句について、文法上の主語との関係を説明しています。そして全文を訳しました。そのように説明することで、英文の根底にあるものを理解し、『THE HAPPY PRINCE』の英語の世界に入っていけるように試みました。

なお、これから原文を読み進めていきますが、書き手あるいは話し手が「文法上の主語について過去の事実として述べている」場合についてはここで詳しく説明しましたので、特

に説明を要する場合を除き、冗長さを避けるため説明を省かせていただきます。

また、この童話に登場する 'I' はこの童話を過去のこととして書いていますので、書き手が文法上の主語について現在の事実として述べていることはありません。そこで話し手が「文法上の主語について現在の事実として述べている」場合について説明しますと、話し手が話しているときを現在として物事をまるごと視野に入れるぐらいの時間の幅を持って、文法上の主語について現在の事実として述べていることをいいます。「文法上の主語について現在の事実として述べている」場合についても特に説明を要する場合を除き、冗長になるので説明を省きます。

## 第2章

---

# 『THE HAPPY PRINCE』を 動詞に着目して読む



## THE HAPPY PRINCE



HIGH above the city, on a tall column, stood the statue  
[kɔ:ləm] (1) [stætʃu:]  
of the Happy Prince. He was gilded all over with thin  
(2)  
leaves of fine gold, for eyes he had two bright  
(3)  
sapphires, and a large red ruby glowed on his sword-hilt.  
[sæfərəz] [rú:bí] (4) [só:d hilt]

(1) *HIGH above the city* は「市より上に高く（町の空高く）」、*on a tall column* は「高い円柱の上に」という意味である。*the statue of the Happy Prince* が文法上の主語であるので、*stood the statue of the Happy Prince* は「幸福な王子の像が立っていた」となる。

(2) 〈be gilded with …〉で「…（金箔を）着せられる」、*all over* で「体じゅう」なので、*He was gilded all over with thin leaves of fine gold* は「彼は体じゅう上質の金の薄い箔（薄い純金の箔）を着せられていた」となる。

(3) *for eyes* は「両目のためには（両目には）」、*he had*

# 途中省略

続きは製品版にてお読みください。

編著者プロフィール

田村 和子 (たむら かずこ)

1950年静岡県生まれ。主婦。

若い頃独学で科学英語を学び、英語に関心を持つ。『THE HAPPY PRINCE』の動詞に着目して、多くは主語について登場人物の立場で説明し、これを読み解く。回数の上では日本中のどなたよりも多くこの童話を読んでいるかもしれないと最近思う。

## 改訂版『THE HAPPY PRINCE』をハートで読む

---

2011年6月15日 電子版発行

著者 田村 和子

発行者 瓜谷 網延

発行所 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Kazuko Tamura 2011 Coded in Japan

ISBN978-4-286-10415-7

(紙の書籍をお求めの場合には、お近くの書店にてお尋ねいただくか、文芸社ホームページ

<http://www.bungeisha.co.jp> をご参照ください。)

新 11.05.20 フクイン